主日の福音 2026/3/29(No.1405)

受難の主日(枝の主日)(ルカ 2:16-21)

本当に、この人は神の子だった

「本当に、この人は神の子だった。」（27・45）これは百人隊長の言葉です。百人隊長の信仰告白で物語を終えています。弟子の一人の信仰告白とか、イエスのそばを離れずにいた母マリアやその他の信仰者の告白ではありません。何か、これまで見過ごしていたものがここにあるのではないか。そういう思いで取り上げてみました。

百人隊長は、おそらくローマ人であり、ユダヤ人ではありません。ユダヤ人ですら、指導的立場にある人たちはイエスを信じようとせず、死に追いやりました。しかも重罪人としてです。このイエスを、百人隊長は、一連の出来事を踏まえて、「本当に、この人は神の子だった」と結論づけたのです。

百人隊長の仕事はどんなものだったでしょうか。百人の部下を統率、指揮し、訓練によって軍隊の規律を維持していた人です。「軍団の背骨」と言われることもありました。そういう任務にあるのですから、当然理性的な人であることが求められます。感情的に行動せず、客観的に、また冷徹に任務を遂行する人です。

もし百人隊長に、何かの命令が下れば、部下を使ってその命令を確実に実行します。基本的にどんな命令であっても、です。「この命令に従っても良いのかな」とか考えません。その百人隊長が「本当に、この人は神の子だった」と証言した、信仰告白したことが非常に意義深い。私たちはこの点を、ひょっとしたら今の今まで見落としていたのではないでしょうか。

決して情に流されず、理性的に物事を判断し、行動する。その人の目をもってしても、「本当に、この人は神の子だった」のです。情に流される人の言葉や、カネを渡せばどうとでも証言する人や、いろんな人間関係を考慮して言う人の言葉ではなく、常に公正・真実を述べる人が、「本当に、この人は神の子だった」と証言した。信仰告白した。これ以上の立証をできる人がいるでしょうか。百人隊長に証言させた福音記者には、明らかに狙いがあったに違いありません。

百人隊長にこれほどの信仰告白をさせた力は何でしょうか。「百人隊長や一緒にイエスの見張りをしていた人たちは、地震やいろいろの出来事を見て、非常に恐れ、言った。」（同 54）「恐れ」が信仰告白の力の源でしょうか？恐れで、人は大胆になれるのでしょうか。私は別の何かが、彼に大胆な信仰告白をさせたのではないかと思っています。あくまでも思い巡らした結果です。

ローマ帝国が支配している領土に軍隊を置くのは、暴動を鎮圧させるためです。実際、イエスと一緒に十字架に磔にされていたのは二人の強盗です。ルカ 23 章 19 節によれば、バラバは暴動と殺人のかどで投獄されていた人でした。バラバはもちろんですが、イエス様も、いつか暴動を起こすかもしれないと宗教指導者に睨まれ、この百人隊長の監視下

にあった人かもしれません。

すると、先週のことが思い出されます。イエス様はラザロをよみがえらせています。このイエスは、暴動を警戒する百人隊長にとっては十分警戒対象になり得たと思います。暴動を起こさなければ手を出しませんが、一旦暴動を起こせば制圧する。付かず離れずの距離で見張っていたのかもしれません。もしこの場面でも群衆に紛れて立ち会っていたのなら、彼も「ラザロ、出てきなさい」という声を聞いたことでしょう。

百人隊長は「命令に従う」「情に流されない」という縛りがあります。本来なら、決してそこから出ることは許されません。しかし彼は、イエスの最期に起こった地震やいろいろの出来事を見て、命令の縛りから出てきました。感情に流されてはいけないのですが、自分の本当の感情を言葉にしました。イエスの「ラザロ、出てきなさい」は、百人隊長にも響いていたのではないでしょうか。

私たちは、イエス様がお亡くなりになったことは私たちの救いのためであることを知り、理解しています。しかし、さまざまな縛りのために、イエスが十字架につけられ、人類を救ったことを私たちから告げられても、「本当に、この人は神の子だった」と言えないでいる人がいるのではないでしょうか。

そうであれば、私たちは、その人に響くような「ラザロ、出てきなさい」を伝える工夫が必要になります。私たちにはイエス様の十字架上の死を仰ぎ見て、しなければならないことがはっきりしたのです。それは、私たちのように信仰を表明したくてもさまざまな縛りで表明できずにいる人に、その人に伝わる言い方で「ラザロ、出てきなさい」と背中を押してあげることです。

あなたの夫・妻は、カトリックの信仰を表明したくてもなにか縛りがあって身動きが取れないでいるのではないでしょうか。その背中をそっと押してあげるのは、配偶者のあなた、また家族のみんなです。イエスは十字架にかけられるまでの歩みの途上で、「ラザロ、出てきなさい」と言ったのです。この言葉が現代にも響くために、あなたのお手伝いが必要なのです。

聖木曜日(ヨハネ 13:1-15)